

中国帰国生徒が日本社会を理解すること

中国帰国生徒向け選択科目「政治経済」実践の意義

佐藤鉄郎

(東京都立千歳高等学校社会科)

1 はじめに 私の個人的な思い出

ありきたりな言い方で恐縮あるが、時の経つのは本当に速い。教員生活を始めて、はや四半世紀。我がことながらよくやってきたものだと思う。それにしてももう一つ充実感が感じられないのはなぜなのか。何かを達成しながらというよりは、何かをし足りていないという意識にさいなまれるままに、この貴重な四半世紀が流れていってしまった気がする。

1960年代末以来の学生運動の名残りをどこかにひきずったまま、私は教員になった。それは学校という場には、例えば会社にはない、人間と人間との濃密な関わり合いがあると思ったからにほかならない。しかし未だに何となく充足感に飢えているのは、実は学校の場にもそうした濃密な人間と人間との関係があまりみられないからなのかなと思う。そのことの象徴的な表れは、学校に人間として生きることを考える時間も空間もほとんどないことだ。学校の場で生徒が一番学べべきことはどう生きるかであるし、教員という立場の人間が一番考えなければならないこともどう生きるかだと私は思う。しかし、その響き合いが学校の場から聞こえてくることはごく稀だ。

誰が悪いわけでもない。組織が悪いとか社会が悪いとかいっても何も始まらない。それがほかならない現実というものなのだろう。それでも、その現実突き当たると、学校という場に自分が満たされる人間関係を求めたらとてもやっていけない、そう思ってしまう。こんなことを言うと“なんと傲慢な奴”と思われそうだが...

しかし、そんなベシミスティックな私にも救いはあった。中国帰国生徒がそれである。かつて私は、職を休して青年海外協力隊に参加。中国で日本語教師とし

て2年間暮らして帰国。そして千歳高校に転勤して中国帰国生徒に出会った。中国で生まれ、小学生あるいは中学生、高校生まで中国で育ちながら、祖母ないしは両親のいずれかがいわゆる中国残留婦人または中国残留孤児であるがゆえに、日本にやって来るようになった中国帰国生徒。彼らは一人一人さまざまに事情が違っている。もともとの性格の違いは当然のことながら、中国での育ち方も日本に来てからの身の処し方も違っている。そしてまた、彼らは彼らを分かってくれる人間をより直接的に必要としている。彼らはある日突然、日本という外国に来て暮らし始める。しかも、中国では絶対的ともいえる庇護者であった父や母が、慣れない環境でその役割を果たしえなくなるために、急に自立して生きなければならなくなる。そんな彼らには、さまざまな場面で当面の救いの手が必要である。

一人一人がさまざまな意味で違う彼ら。しかも、さしのべられるべき救いの手を必要とする彼ら。そんな彼らに対して、教員と呼ばれる立場の人間は、徹頭徹尾個として、かつ濃密な人間臭さをもちながら接しなければならない。むしろ、そうはしないで彼らと接している人もたくさんいる。しかし、私にはそうとしか考えられない。そして私は、そんな人間臭さにひかれて帰国生徒との関わりに自分自身の救いを求めようとした。

千歳高校で現在、主として中国帰国生徒向けに開講されている、3年次の選択科目「政治経済」(ちなみに選択科目「政治経済」は一般生徒の大学受験対策向け講座)は、それを担当してきた私にとって、以上のような勝手な思い出がある。

2 中国帰国生徒であるがゆえの“違い”

私の個人的な思い出は別として、公には選択科目「政治経済」がよってたつものは何であったのか。

2年前に卒業した、中国帰国生徒のXさん。放課後の補習の時に私にこう尋ねた。「先生、日本の中国地方の人は中国語話せるの?」と。私は意表をつかれる思いがした。同時に、世界に名を馳せた“中華思想”はここまで浸透しているのかと妙に感心してもみた。中国地方に生まれ育った人がみな中国語も話せればさぞかし楽しかろうと思いつつも、「日本の中国地方は、むかし日本の中心だった京都から遠くもなく近くもなく、中くらいの所にあったから中国地方っていうん

だよ。だから中国語は話せないんじゃないの」と私。

これは確かに極端な例。しかし、帰国生徒の日本社会の理解には、私たちの発想をはるかに越えるものがあることも事実。

中国帰国生徒は、その経歴からして、日本で生まれ育った同年齢の人と同じであるはずがない。さまざまな点で違っている。問題を高校での学習だけにしぼっても、次の二つの点は大きな違いになっている。

第一に、中国での学習内容が、日本でのそれとかなり異なることである。例えば、理数系の科目については、中国の方が早い時期からより高度な内容を教えている。国語といえどももちろんそれは中国語の話である。外国語も日本のように英語一色というのではなく、ロシア語や朝鮮語の場合がある。体育や芸術科目は、授業に参加するか否かから、個々の生徒の自主的な選択に任される部分が多い。家庭科という教科や保健・地学といった科目はない。社会科ではもちろん日本史はなく、倫理も別の意味でなく、世界史・地理や政治経済の内容は全く異なる。

こうした違いはさらに中国国内の地域によってさまざまに異なり、中国出身者だからといって一通りにとらえることはできないことになっている。事情は幾重にも複雑なのである。

第二に、学校場で教えらるる内容を理解するうえで、いわば“常識”として備わっていることがまるで違うということである。当然のことであるが、帰国生徒は中国で培われた“常識”をもって学習に臨む。しかし、日本の学校での学習は、生徒たちが日本で育つ過程で吸収・蓄積してきた“常識”を前提にして行なわれる。このいわゆる“常識”の違いは、帰国生徒が例えば日本の文学を読んだり、日本の歴史や地理、さらに政治の仕組みを学んだりする時にストレートに問題になるだけではない。例えば英文を読んでいる時であっても大きな問題になりうる。少なくない英文が、日本社会では“常識”となっていること（例えば12月には、キリスト教徒でなくてもクリスマスを祝う）を前提に書かれているからである。

さて、この二つの違いのうち前者はある意味で当然というか、やむをえざる違いである。その違いは時が経つとともに何らかの形で解消される、一種の量的な違いといえる。これに対して、第二の違いは質的なものだ。この頃の流行りの言葉でいえば、アイデンティティに関わる違いである。その違いをどうとらえるか

が、ただちにその人の存在そのものに関わってくるからである。

3 中国帰国生徒の“違い”をどう考えるか

では、以上のような意味での違いをどのように考えるべきなのだろうか。

一つの考え方は、そうした違いはすみやかになくすべきだというものである。よく言われるような“郷に入りては郷に従え”という考え方がそれである。帰国生徒といえども、日本で生活することになった以上、中国で培われたことはご破算にし、日本になじめるように日本の教育体系にすっぽり入りこみ、そのなかでできるだけ日本人と同じような“常識”を育てるべきというわけだ。

もう一つは、これと逆の考え方。つまり、帰国生徒は中国で生まれ育ったのだから、無理をしてまで日本社会になじむ必要などはない。したがって、日本の教育体系をそのまま受け入れる必要はなく、自らの選択で適宜それに適応していけば良い。まして、多大なエネルギーを消耗して日本人と同じになろうと努力する必要などない。自分の“常識”に従って生きていって、何ら問題があるはずがないという考え方である。

私は以上のどちらも違うと思っている。それは、どちらも極端にすぎるからというのではない。帰国生徒という存在が日本の学校に一定の位置を占めることになったことの意味は、そうした二つの考え方ではとうてい汲みきれないと思うからだ。

帰国生徒が日本社会の“常識”によってたつべき必然性などはない。あらゆる人間がそうであるように、帰国生徒も自らが自然に育ってきた過程で培われた“常識”にこそよってたつべきである。仮に、帰国生徒の側が自らの“常識”にたって行ったことに対して、一方的に不利益を被らされたり、差別を受けたりすることがあるとすれば、その場合には、改められるべきは日本社会の側の“常識”であって、帰国生徒の側のそれでは決してあるまい。

もっとも、そうだからといって帰国生徒が日本社会の“常識”を全く無視してよいかといえばそういうものでもないだろう。帰国生徒が日本の文化や社会常識などを理解することは必要だ。ただ、それは日本人と同じようになるために必要なのではない。それは明確にしておくべきだ。では、なぜ必要だといえるのか。

帰国生徒の側から言えば、一種の生活の知恵ともいべきものとして、日本社

会の“常識”を知ることは必要であろう。どんな形にせよ、日本で生きていくうえで日本社会との関わりはさけられない。となれば、そこで“常識”とされていることは理解しておくに越したことはない。生活の便になる。それは、どんな人であれ、外国で暮らすとなればひととおり心得ておいていいことだろう。

さらに積極的な理由がある。帰国生徒が自らの“常識”を保ちながら、日本社会の“常識”を理解し、それを評価することは帰国生徒にとっても日本社会にとってもいいことである。それによって、両者はより深い次元で交流し合い、刺激し合えるからである。内部にはなかなか見えてこないものが、全く違った立場からは透けるように見えることもありうる。違った立場からの指摘は貴重だ。そのような交流・刺激のし合いこそが、違ったもの同士の関わり合いが生み出す豊かさというものだろう。特に、どうひいき目にみても、外に対して閉鎖的でありすぎる日本の側にとって、その意義は大きいといえるのではないか。

4 「政治経済」、授業の進め方

さて、以上のような帰国生徒の“違い”をめぐる模索の過程は、そのまま我々が千歳高校で、帰国生徒向けに選択科目「政治経済」を開講するに至るまでの過程であった。つまり帰国生徒一人一人の学習歴の違いをふまえたうえで、彼らが日本社会の“常識”を理解するための一助として、また彼らが日本社会を独自の観点から評価していけるようになるための一助として選択科目「政治経済」が準備されたのである。この科目を設けることで、帰国生徒が広くそして深く日本社会全般の事情を理解し、それらを独自の立場から評価していけることが期待された。

この「政治経済」が初めて開講されたのは1995年度のことである。それは千歳高校が帰国生徒を受け入れ始めて4年の歳月が流れてからのことであった。内容は主として帰国生徒向けであるが、そうした趣旨を了解したうえで選択するのであれば、帰国生徒以外の者でも選択可能とした。以来今日まで3年間、受講生は結局帰国生徒のみで、95年度2名、96年度2名、97年度1名と推移してきた。在籍する帰国生徒全員がこの科目を選択したわけではない。選択はあくまでも本人の自由である。単位数は2単位（週2回授業）。

教材は95年度1学期のみ市販の教材（専門教育出版「実例で学ぶ日本語新聞

の読み方」1991年）を使い、その後はすべて授業当時最新の新聞記事によっている。市販の教材をやめたのは、取り上げられている記事が必ずしも高校生にふさわしくなかったこと、興味をもてる内容が少なかったこと、新聞記事としては古すぎて、ニュース性に欠けたことなどによる。

授業の流れはおおよそ次のようである。

(1) テーマ導入のための話し合い

あらかじめテーマを示して話し合いをすることはしない。記事も示さない。ごく身近な話題について話し合いを始める。そして自然の流れのうちにテーマにいきつかせる。生徒が話す時の日本語の間違いは、極力訂正しない。訂正ばかりしては話の流れができないからだ。最低限気になったことだけを訂正する。つまり、実質的にはフリートークングだ。また、この段階での話し合いでは、必ず中国の場合と日本の場合とを比較して考えさせるようにする。

生徒はよく話す。特に自分の思い出話になった時などは能弁であり、この段階での話し合いだけで1時間が過ぎてしまうこともあった。

(2) 記事の読解と関連事項の解説

記事を読む。ここでは包括的な日本語指導が行なわれる。受講生が極端に少ないので、一人が読む量もかなりになる。読み練習・単語の意味・難しい用語の使い方・文型の応用練習など、日本語の総合的な演習がここで行なわれる。日本語の間違いは可能なかぎり厳密に訂正される。また、ここでは単に読解だけではなく、関連した日本社会の諸事情の解説も行なう。

この読解では、生徒の日本語能力がより明らかになる。話すことは結構できる生徒であっても、読むことはかなり正確さを欠くケースが少なくなかった。さらに、外来語の読み方・意味・用法等の難しさも際立った。

(3) まとめのための話し合い

この段階での話し合いのポイントは、記事の内容の確認とそれに対する自分の意見の表明にある。当然ながらテーマをはっきり示す。したがって、話し合いはフリートークングというよりは、自分の意見のまとめに向かわせるという意味でかなり誘導的なものになる。

(4) 作文

95年度は、以上の三つのステップで一つのテーマを終了して次のテーマに移っ

ていた。しかし、それではどうしてもまとまりがつかない感じが残った。初年度の私のコースデザインは、やはり不十分であった。最後のまとめが欠けていたのである。そこで96年度から第四のステップとして作文をとりあげることにした。作文を加えたことで、96年度からは「まとめのための話し合い」は、作文の準備という意味をもつようになった。

ところで、この作文はワープロを使って書くことにした。ワープロを使うことにしたのは、生徒からワープロも勉強したいという要望があったことと、日本語を書く力をより正確にさせるためには、ワープロが一定程度有効だと考えたからであった。幸い、帰国生徒用にすでに買ってあったワープロが6台ほどあったので、ワープロを使うことに、機材のうえでの支障はなかった。

作文の構成は、前述の通り、「まとめのための話し合い」で大まかな見当をつけておく。文字表記については、生徒がワープロを使って書いている間中、つきっきり状態で質問に応じ、訂正すべきところはいっしょに考えながら訂正する。生徒から作文が提出された段階では、文字表記等に間違いがあっても書き直しは要求しなかった。この段階での間違いは、いずれも許容できる範囲の間違いであり、それ以上の訂正は次回以降の作文意欲を削ぐことにもなると考えたからである。

こうして、作文を書いてそれを提出すればそのテーマは終わり。次のテーマに進むことになる。ちなみに1年間に扱えるテーマは12～15テーマだった。

5 「政治経済」、授業例

では、いくつかのテーマを例にして実際の授業の概要をみてみよう。作文を取り入れていなかった1995年度については省略した。なお、作文中の清音と濁音、助詞、漢字等の間違いはすべて原文のままにしてある。

< 1996年度 >

対象生徒 A；吉林省蛟河市から92年7月帰国。帰国後、一般中学校2年生に編入学。受講当時（高校3年次）19歳。女子生徒。

B；黒龍江省牡丹江市から93年2月帰国。帰国後、中国帰国者定着促進センターで研修を受け、その後自立研修センターで日本語

を学ぶ。日本の中学校を経ずに高校入学。受講当時（高校3年次）20歳。女子生徒。

テーマ例1 「日本人は『国際人』になれるか」

【導入のための話し合い】

最初に日本人の印象を語ってもらった。日本にやって来てから現在に至るまでに感じた日本人の印象全てである。2人の意見は共通していた。日本に来たばかりの頃は日本は暮らしやすいところで、日本人はみな親切だと思っていた。その印象はだんだん悪くなっていく。悲しいかな、日本人は実は冷たいのだと彼女たちは感じるようになる。さらに、日本人とは表面的には付き合えるが、真の友達と呼べる人は今までできなかったし、将来もできないだろうとあきらめているという点まで共通していた。これを聞いて私は少なからぬショックを受けた。

次に、では日本人のどこがよくないかを話し合った。2人ともまず、日本人がものごとをはっきり言わないことを強調した。Aは、それに加えて、日本人は本当の意味で相手の気持ちになって考えることが少ないこと、そして結局日本人はなにごと自分中心だから付き合いにくいと主張した。Bはさらにきびしく、日本人は人間を信頼する心をなくしているのではないかと、そういう心をなくした人間は嫌いだとした。Bはより現実的に、結婚するなら日本人は絶対選ばないと言っていた（これには後日談あり。Bは卒業後半年ほどで本当に結婚した。もちろん中国人と）。いずれも日本人の一人として耳の痛い話であった。

ついで、日本人に差別された経験があるかどうかを尋ねた。Aは、自分自身では差別されたと感じることはなかったが、日本人は何となく偉そうで、心の中には弱い人やできない人を差別する意識があるのではないかと思うとのこと。Bは、帰国直後は自分が「外国人」だということで差別を受けている感じがしたし、国籍を日本に移した今も、同じように差別を受けていると感じている。彼女は朝鮮族であり、朝鮮語も話せる。そのこともあって、日本で在日朝鮮人・韓国人と話す機会もある。そうした時、在日朝鮮人・韓国人のなかには日本人を罵倒する言葉を発する人もいると嘆いていた。その話には迫力があつた。その話でもりあがったところで記事を導入。

【記事の内容と主な解説事項】

記事の内容は次の通り。二セ米ドル紙幣が話題になり、それに朝鮮人が関わっているのではないかという心ない噂が流れている。その結果、朝鮮学校の生徒に対して、チマ・チョゴリが切り裂かれたり、暴言が浴びせられたりする事件が相次いでいる。同種の事件は1994年4月頃から7月頃まで連続してみられたが、それ以後は収まっていた。今回、それが再現した形だ。

主な解説事項は、在日朝鮮人の歴史的経緯・朝鮮学校の存在・日本人の外国人観（特に日本人の閉鎖性）など。

【まとめのための話し合い】

読解後、日本人の外国人観を前提にして、将来日本人は真の「国際人」になれるかどうかを話し合った。これについては、当然ともいえるが2人とも否定的。その理由はいわずもがな。自分たちが接してきた日本人が、外国人と本当の意味で仲良くやっていけるとは信じられないということにつける。聞いている私にはやや辛い話であったが、そこは彼女らの実感。素直に聞かざるをえなかった。

【 作 文 】

私は3年前日本にきました。そして日本人と接触することができました。日本人と接触してわたしはいろんなことがわかりました。

日本にきた翌日区役所に行きました。係の人が私に親切にしてくれました。何も知らなかった私は安心しました。その時私は日本人はやさしいと思いました。

だんだん日本語ができるようになったとき私は日本人が全部そんなにやさしいとは限らないことがわかりました。弱い人は強い人にいじめられ、また外国人もいじめられたりします。私が思うには日本人は仕事の面にはやさしいけれども、人間的な付き合いはそんなにやさしくありません。これは中国人と反対です。

もう一つ問題があります。日本人は友達に対しても、自分の本当の気持ちをだしません。だから人と人とも付き合いにくいです。

ですから日本人は国際人になるのがとても難しいと思います。

(A)

私は日本人は「国際人」になりにくいと思います。なぜかというと日本人は自分の気持ちをはっきりしないのです。外国人に差別が大きいです。外国人を絶対自分の仲間に入れようとしません。いじめとか暴力をふります。もちろん全部の日本人が悪いと思いません。中にはものすごくやさしい日本人もいます。

外国人に対してやさしい日本人もいます。しかしそれはほんの少しの日本人です。日本人がもう少し自分気持ちをはっきりしたら人との付き合いがしやすくなると思います。そうしなかったら日本人はなかなか国際人になりにくいと思います。

(B)

テーマ例2 「“いじめ”をなくすためにはこうしたらいい」

【導入のための話し合い】

まず、子供のとき以来、人をいじめたことがあるか、また人にいじめられたことがあるかを聞いた。2人とも中国ではいじめたこともいじめられたことも全くなかったと言った。というか自分たちが育った中国には、そもそも“いじめ”というような問題が存在しなかったという認識だろう。日本に来てからは2人の間で少し経験の違いがあった。どちらかといえばおとなしく穏やかな性格のAは、日本に来てからもいじめられたことはないという。これに対して《テーマ例1》で外国人に対する差別を訴えたBは、アルバイト先（中華料理店）で「外国人」であるがゆえに“いじめ”にもあったことを思い出しながら話した。

ついで、中国で“いじめ”がないのはなぜなのかを話してもらった。これに対する2人の答は、中国の学校では教師が絶対的な権威をもっていて、その目を盗んでいじめのようなことはできないこと、生徒同士の関係も日本と違って、いじめたりいじめられる関係にはなっていないことなど。ここで記事を導入。

【記事の内容と主な解説事項】

記事の内容は次の通り。社会現象となった“いじめ”の問題について、各国がどのような取り組みをしているのか。文部省は、今回初めて“いじめ問題国際シンポジウム”を開いた。討論者はイギリス・ノルウェー・オランダ・オーストラ

リアの心理学者や専門家である。参加した日本の生徒指導担当の教師らは、いじめ対策に役立つものはないかと、外国での取り組みに熱心に耳を傾けていた。

主な解説事項は、日本の教育制度・受験戦争・教師と生徒の関係・“いじめ”の例など。

【まとめのための話し合い】

読解のあと、どのようにしたら“いじめ”がなくなるかについて話し合った。ふだんあまり積極的に自分の考えを主張しないAだが、このテーマについては珍しく明快だった。意外にも思えたが、いじめられる方が悪いとはっきり言い切ったのである。それは、日本の中学校で自分が目撃した“いじめ”の実態から感じたことであり、また仮に同じことが中国の学校であったなら、まずいじめられる方が問題にされるだろうと考えたからでもあった。Bは親の責任を強調した。親がしっかりしていればいじめめることもいじめられることもないというのである。

前段の話し合いと合わせて考えると、中国では教師・親の権威が絶大であり、その両方で“いじめ”は押さえ込める、日本でもそうすれば問題は簡単、ということなのだろうか。日本の教師・親の奮起が期待される(?)話し合いだった。

【 作 文 】

私が中学校の時ある男の子がみんなにいじめられるのを見ました。その男の子はいつも教室の隅で男たちに殴られたり、女の子にカバンを投げられたり、教科書を踏みつけられていました。最初はかわいそうだと思います。しかし、だんだんいじめている人がすべて悪いのではなく、いじめられている人にも原因があると思うようになりました。

いじめられている人は女の人みたいでした。女の子と一緒に遊びたいのに女の子たちに嫌われてる、男の子にも嫌われてる。授業が終わると、彼はすぐに女の子のところに行きます。彼女たちに無視されても、殴られても決して何もいわず抗議もしません。

いじめをなくすためにいじめられてた人にも努力して自分を変えなくてはなりません。まず自分はどうしてみんなにいじめられるのを探します。そしてほんとに自分がまちかえるかどうかを考えます。もし自分が違うならそこを直しま

す。もしそうでなければ先生や、家族に相談します。いじめるほうにもたくさん問題があると思います。かれらは早く自分が人をいじめてることに気づいていじめられてる人の気持ちも考えてほしい。

人間は同じだから、平等であると思います。いじめや、いじめられるようなことを早くなくしてほしい。

(A)

最近、テレビや新聞で「いじめ」の言葉がよく目につく。そのうち9割以上が小学生から高校生のなかで発生している。中でも小学生が最も多い。恐ろしいのは「いじめ」で自殺した子供もなかにいる。中にも集団で無視したり、悪口を言ったり、金を脅し取ったりするのがもっとも多い。

「いじめ」問題はますます関心を持たれていて、いまところどころで「いじめ」にあつたらどうすればいいのか、いじめの専任先生を任命し、カウンセラーなど24時間無料相談を行なわれている。

それにしても、「いじめ」の問題は人の目が届かないところで未だに存在している。私はいじめてる人といじめられている人、両方に問題があると思う。いじめてる人は自分より弱い人に対して思いやりの気持ちがない。いじめられてる人は決して自分の感情を表面に出さないで内向する。

「いじめ」をなくすためにはどうすればいいのか？ 私は親の役割が重要だと思う。親自身が人に対する思いやりの気持ちを実際に子供に見せて上げる必要があると思う。例えば、電車のなかでお年寄りを見るとすぐ席をゆずってあげることによって子供に優しい心を持たせるのはとても大切だと思う。人をいじめている子供をみて「ああいうことはいけない」と教えるのも重要だ。

自分の子供がいじめられないために親は常に子供の行動に気を配り、積極的に子供と接して、時には親とし時には友達として活躍しなければならないと思う。子供の相談を無視したり、叱ったりしてはいけない。

親と子供の間信頼関係があればいじめたり、いじめられたりする可能性が少なくなると思う。

(B)

< 1997年度 >

対象生徒 C ; 北京から92年7月帰国。帰国後、一般中学校1年生に編入学。
受講当時(高校3年次)17歳。男子生徒。

テーマ例1 「日本人は本当に金持ちだろうか」

【導入のための話し合い】

まず、日本人はよく金持ちだといわれるが、実際に日本に来てどう思うか聞いてみた。予想通りというべきか、Cの印象は日本に来る前と来てからではだいぶ違っていた。つまり日本に来てみると、実際には日本人はそんなに金持ちではなく、多くの人がお金にきゅうきゅうしているのがわかったということ。特に住宅に困っている人が多いことには驚いた様子。中国では“単位”といわれる職場が超低価格で住宅を提供する。日本では、住宅を手に入れることは一生の大問題。両国の間で大きく事情が違うがゆえに鮮明に意識されたのだろう。

ついで、私が問いかけた。「それでも日本にお金がたくさんあることは客観的な事実。ではどこにあるのだろうか」と。そしてそのお金のありかは、“個人”にではなく“会社”にあるということを説明。そのことから記事を導入した。

記事はやや難解だった。当然、解説事項も経済分野のやや高度なものにもおよんだ。あえてそのような記事を選んだのは、Cが経済にも興味をもっていたこと、そして高度な内容であっても十分こなせる力をもっていると考えたことによる。

【記事の内容と主な解説事項】

記事の内容は次の通り。第一勧銀の総会屋への不正融資が明るみにでた。株主総会対策のために行なわれた不正融資額は118億円にのぼるといふ。こうした事実を第一勧銀側も大筋で認めている。これに対して預金者は「別の銀行に口座を替える」「預金者をなめている」などと怒りの声をぶちまけている。

主な解説事項は、総会屋・株主総会の意味とその実態・株取引(証券市場を含む)・日本経済における銀行業の位置と役割など。

【まとめのための話し合い】

読解後の話し合いでは、株取引のことにずいぶん時間を費やした。内容の性格上、主にCが質問し、それに私が答えるという形になったが、相互に結構満足のいく話し合いだった。

【作文】

んー、どうだろう。最初、日本に来る前に日本人はお金持ちだと思いました。でも実際Japanに来て何年か住んでみたらそんなことないと思いました。例えば来る前に大部分の人が2階建ての家に住んでいると思いました。日本に来て生活してみると、確かに実家をもつ人はいるけど、然程(さほど)ではなかった。みんなアパートとかマンションに住んでいて、思ったほどみんなが金持ちではなかった。

Japanese Moneyを中国に持ってたら価値があるかもしれないが、でも日本で生活していたら毎月平均5万円くらいしか貯金できない(毎月給料20万円くらいとすると)。もしこの1ヵ月の給料を中国に持ってたらすごいことになるよ。1万円で800元と両替したらいくらになる。そう、16000元です。上手く使えば最低1年以上過ごせるでしょう。だから中国人たちはお金を稼ぐために日本にきて一生懸命働いて、何年後中国に戻って豊かに暮らす。(それにしても毎年中国人の密航数が一番多いのは何とかならないかな。なぜっていうと何か事件が起こった時すぐ中国人が浮かびつく。だから今になってもみんな中国人のことを信用できないわけよ)。

結局改めて知りました、日本人たちはみんな金持ちでないこと。最初は、多分金の価値に騙されたと思います。決してみんなが金持ちでない事が改めてわかった。

(C)

テーマ例2 「大学はこうあるべきだ」

【導入のための話し合い】

まず、C自身の進路のことを話し合った。むろん、話し合いをする前にCが卒

業後どうするかは知っていたが、そこに至るまでの心境を知りたかったからである。

Cはもう勉強を続けたくないから大学にはいかないといった。1年間だけ中国語を学ぶ専門学校(研究科)に進み、そのあとは中国語力を生かした仕事を探すとのこと。なぜ勉強したくないか、その理由がおもしろかった。Cは中学1年の途中まで中国にいたが、中国の小学校・中学校ではものすごく勉強させられた。文字通り朝から晩まで勉強漬け。日本に来たら勉強は適当でもOK。宿題を忘れても先生に怒られなかったことにはびっくりしたとのこと。Cは、自分の勉強意欲も能力も中国で使い果たしたと言っていたが、そんなことがありうるのだろうか。

Cの名誉のために弁解。これは冗談。Cには生真面目な面もたしかにある。自分自身の進路についてのあと、私が日本の大学についてどう思うかと問うと、かなりきびしい批判を展開した。大学は勉強をしたい人が、勉強をするためにいくところ。それも常識以上のことを学びたいから大学に行くのだろう。大学にいてそのようにする人に対しては自分は尊敬の気持ちをもつ。自分にはできないから。しかし、日本の大学生の多くはそうではないだろう。そして受け入れる大学の側も、授業料ばかり高くして、本当にいい教育をしようとしているのか疑問だと。これには私も大いに同感だったので、私が知っている大学進学者のさまざまな例や大学の実態を話した。そのあたりから記事を導入。

【記事の内容と主な解説事項】

記事の内容は次の通り。国立大学の独立行政法人化案など、大学の改革気運が高まっている。そうした気運を受けとめる形で、各大学は開かれた大学・入試改革・他大学との連携などの変革を模索している。例えば東京大学では、千葉県柏市に新キャンパスをつくり、ここで「学融合」「少数精鋭主義」「高度教育研究志向」などを実現する構想をうちだしている。しかし、その改革案に立ち入ってみると、設置研究科数が二転三転するなど不備な点が少なくなく、掛け声倒れにおわるのではないかと不安だという声もある。

主な解説事項は、日本の教育制度・東京大学の占める位置・受験競争・大学生の実態・学歴と年功序列制度など。

【まとめのための話し合い】

読解後は、大学改革案をお互いに勝手に話し合った。Cの改革案は具体的だ。教室を小さくしろというのだ。鋭い。私の「大学数90%削減案」には、「それでは大学にいける人が少なくなりすぎ」と反論していた。Cは自分は大学にいきたくないとしながらも、大学に強いメッセージを送っているようでかわいらしかった。

【作文】

大学は高校が卒業したらもっと勉強したい人が行って、より高度な知識を学ぶために作られた場所ではないでしょうか。(それにしても最近酷いところもあるよな)。

おれは大学なんか行かないけど、理由としては(そうだな、これにしよう)4年間はまず耐えられないな。そしてもう勉強も飽きてきたから。(大体4年間のなかで何をやるんじやい、ちきしょう)。まあまあ落ち着いて。友達を作って遊びたいけど、でも2年後くらいで働きたい。だから専門学校行くんじやい。

今の大学は毎年人数が減っているらしいけど、その理由については多分今の世の中では勉強を好む人が減って、大学を卒業してもなかなか(まで行かないかもしれない)就職できないのが原因かな～? それと今の大学はいい加減(だと思ふ)じゃないのかな。テレビとかで大学の教室を見たことがあるけど(ていうか教室じゃなくない、でかすぎるんじやい。教会みたいだよ! もっと小さくせえ)。1人の先生がなん十人にきちんと自分が伝えようとするのを伝えるのか。例として、もしみんな分からないことがあって1人ずつ質問したら答えられると思う! できないでしょう。今の大学では、ちゃんと勉強しようとしてもできない訳でしょう(多分)。だからオレは今の(今のよ、将来どうなるか知らないけど)大学はいい加減だと思います。

僕の意見としては、まず一ぱ～ん大事なことは、教室を小さくしろ。次に自分のとこの学生が卒業したらちゃんと仕事くらい保証してあげなさいよ。可哀相じゃろう。だいたい高校を卒業したら、もう十分だと思うけどねオレは。

(C)

6 「政治経済」実践の成果と課題

以上のような授業実践を通じて一番の成果だと思えることは、私と帰国生徒一人一人が親密に、しかも内容のある関わり合いがもてたということである。当然彼らのものの考え方・性格もある程度分かることになり、私自身のそれらも彼らに示すことになった。言い換えれば、彼らと思考しながら人間と人間の交流ができたといえる。そのようななかで生徒たちは自由に自分の意見を表明できた。それは我々が千歳高校の人権尊重教育推進の一環としてめざしている、一人一人の可能性を引き出す教育の最たるものだともいえる。

そうであれば、本来は一般の授業の場にもこうした関係がもちこまれるべきなのだろう。だが、現実には教育にも効率だけが求められる時世。少人数教育といっても30人台の授業がようやく実施されようとしているという程度では、一般生徒にも一人・二人のための授業を行なうなど、望むべくもない。

朝日新聞の記者が千歳高校に取材に来たおりに、私と一人だけの生徒との授業を見学して、「こんなことが学校でできるんですか」とうなったが、それもあながちオーバーなことではない。繰り返しになるが、はなはだ残念なことにこうした関係は今日の教育の場には極端に少ない。求めようにも容易には得難い。

それはともかく、このような帰国生徒と私との人間関係を通じて、この授業の本来の目的である、帰国生徒が日本社会の“常識”を理解し、それらを独自に評価できるようになることも、ある程度達成できたかなと思っている。しかし全体を振り返ってみれば、はなはだ心許ない実態があったことも否めない。それらはいずれも今後の課題として残されている。

第一に、親密な人間関係と裏腹の関係にあるともいえるが、一人・二人の授業では、どうしても馴れ合いともいべき関係が作られてしまうことだ。きびしいテストを課すわけでもなく、評価基準も厳密なものとはいえない。そこに若干の甘えが生徒・教員相互に生じてしまうことは否定しがたいことであった。もっとも、教育の場がすべて厳格でなければならないということもなかりう。要は程度問題ということだろうか。

第二に、書く力を引き出すことの難しさである。新聞記事を教材とするのはよかった。話し合いは活発に、楽しくやれる。読解もそれなりに取り組める。しかし、文を書く段になると生徒たちは詰まってしまう。授業をやっていて一番多い

質問は「先生、次、何書けばいい？」だった。私はそのたびに多少イライラしながら、「さっき話し合った時、こうこう言ってたじゃない。それをもうちょっと膨らまして書いたら」と答える。

しかし自分が話した内容であっても、それを文の形に構成するのは非常に難しい。話し合いの内容が結構おもしろかったのに、文になると何とも素っ気ないものになってしまって、読んでいる私がかっかりすることも何度かあった。例えば、1996年度《テーマ例1》の話し合いで、Bは在日朝鮮人・韓国人の被差別意識を熱っぽく語っていた。だが、その作文は量的にもややお粗末であるし、内容的にもだいびさびしいものになっている。また、1997年度の受講生であるCは、性格的にも明るく日本語力も抜群であり、日本社会に適合しすぎている嫌いさもある生徒である。したがって、話し合いはすこぶる楽しい。そんな彼の場合であっても、出来上がった文面の滑らかさとは裏腹に、作文にはかなりてこずっており、私がかく内容を引き出していく場面が少なからずあった。

考えてみれば、文を書くことは高校生全体にわたって苦手なこと。それを「外国語」で書くのだから無理もないかと、私は自分と生徒たちを慰めてみる。しかし、話し合いの内容をうまく作文につなげられない無念さは、未だにおさまっていない。

第三に、技術的なことであるが教材選びの難しさである。タイムリーであり、生徒が少しでも興味をもちそうで、かつ日本社会を特徴的に示す記事を探さなければならぬ。ついでにいえば、日本語教材としても適するかどうか（語彙が難しすぎではいけないなど）も判断材料にしなければならぬ。新聞を読みあさる日々であった。結局、どれだけ適切な教材作りができたかは分からないままであるが、とにかく感覚をシャープにして新聞にあたるしかなかった。

もしかすると、新聞記事以外の雑誌・書籍などにもいい教材があるのかもしれない。私の怠慢さと努力不足のためにそれらにはトライしていない。

第四に、教材選びに関連して、授業内容が必ずしも系統だてられないことである。新聞記事を教材にする以上、どの記事を選び、どのような事項を解説したり話しあったりするかはアットランダムなものにならざるをえない。日本社会のいろいろな問題を系統的にカバーすることは難しい。あらかじめ構成を組んでも、その構成に適したタイムリーな記事が得られるとは限らない。なるべく多様な記

事を選んだつもりであるが、どこまでカバーしきれたかは自信がない。このあたりは経験を積み重ねて、経験的に作り上げていくしかないのだろうか。

第五に、さらに技術的なことであるが、ワープロを使うことの功罪である。

まずワープロを使うことの問題点である。ワープロの使用はワープロ自体の指導に時間がかかる。97年度の生徒はコンピュータにも慣れており、ほとんど苦労しなかったが、96年度の生徒にはワープロの使い方をその初歩から教えなければならなかった。そしてそのために必要以上と思われる時間が割かれた。

ワープロの力に安易に依存してしまうことも問題である。生徒の作文を見れば分かるように一見したところ、漢字もかなり難しいものまでしっかりカバーされていて、体裁もいい。しかし、これは彼らの実力をこえるワープロの実力というか魔力だ。これを錯覚してはならない。ワープロだけにたよって、日本語の力、特に書く力をおろそかにするようであっては本末転倒である。このあたりの指導をどうかみ合わせていくか、難しいところである。

もっともワープロ使用に利点がないわけではない。例えば漢字の読みである。正しい入力のためには、漢字の正しい読みができなければならない。当然日常的にそのための訓練が行なわれる。また、漢字のより幅広い学習も可能になる。ワープロでは漢字変換の際に同音異義語が並んででてくる。その画面をみながら、生徒はある種の発見をしたり、あれこれコメントを加えたりする。ついでにいくつかの漢字を覚えることもあったが、これなどはワープロならではの利点だといえる。さらに、ワープロによると何といっても出来上がりがきれいで、そうであるがゆえの達成感が得られる。これもワープロを使えばこそのことである。

これらワープロの功罪をそれぞれに評価しながら、功を生かしてそれを使用することが時代の趨勢なのかと思うがどうであろうか。

7 おわりに 中国帰国生徒が成長する姿、そして私

さて、日本の中国地方では中国語に通じるのかと思ったXさん。実は、この授業の初年度を受講生二人のうち一人である。その後卒業して、美容師養成の専門学校に進学。1年間の授業を終えて、今は毎月それなりの給料を得ながら、美容師のインターン生として働く。インターン生とはいえ、給料をもらってサービスを提供する身。お客さんとの会話は大切だ。聞けばそれもそこそこにこなして

いるという。ということは、相応の日本語力も、日本のさまざまな話題をお客さんと話す総合的な力も身につけてきたということだろうか。やがて国家試験を経て正式な美容師となり、日本ですでに十数年来美容師をしている叔母とともに、自分たちの美容院を開くことを夢見ている。

こういった卒業生の軌跡をみると、実にたくましいものを感じる。いろんなことはあっても結局、確実に成長していく。そのたくましい生き方を通じて、中国帰国生徒として育ったことが帰国生徒自身の心のなかにも、そして帰国生徒をとりまく人間関係のなかにも、しっかり位置してほしいと願う。特に、若い人たちの間にさえ“疲れ”がみえてきてしまっている今の日本では…。

そして私自身、同じように生きている人間として、卒業後の帰国生徒と付き合い続けていきたいと思う。可能ならば生きるエネルギーをもらいたいとも思う。そんなふうに分わりと考えると、その時だけはなごんだ気持ちになれる。そして、一人でも多くの人があるような“なごみ”を共有できるよう、何らかのネットワークのようなものができればと夢見る。どんなものであれ、夢は常に現実と違うからこそ夢なのだというを半面で知りながらも…。

< 参 考 >

都立千歳高校では東京都の人権尊重教育推進校として、人権尊重の視点から中国帰国生徒の受け入れの在り方を模索してきた。その一応の成果は、研究紀要「共に学び共に生きる」（1994年度）、「共に学び共に生きる」（1995年度）としてまとめられている。

また、中国帰国生徒を特別な制度で受け入れている12の都立高校では、協力して、中国帰国生徒の存在を広く知ってもらうためのパンフレットを作っている。生徒向けパンフレット「いっしょにやろうヨ」および教職員向けパンフレット「共に学び共に生きる学校をめざして」がそれである。

いずれも参考にしてもらえれば幸いである。